

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画 talk baton 07 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



talk baton 07
「建築とコト」

ゲスト
studio-L
渡辺直樹氏

2013年、前職富士通株式会社を退社後、studio-Lに参画。主にパークマネジメント等のプロジェクトに携わる。

今回の会場は大阪府で19番目の府営公園である泉佐野丘陵緑地。難波駅から電車とバスで約50分。快晴の中で汗ばみながら徒歩で約10分。まもなく黄金色へと様変わりする稲穂が広がるのどかな雰囲気を感じつつ歩いていると、緑地出入口にて今回のゲスト渡辺氏が参加者の到着を出迎えてくれた。

■〈つくるコト〉を楽しむ公園

泉佐野丘陵緑地は従来の公園と違い、開園前から地域の方と共にゾーニングを行う、イベントをする等、実験的なつくり方をした、国内初の公園とのこと。

studio-Lは公園の基本計画立案直後から、運営会議やボランティアによる活動の調整等、パークマネジメントを支援している。「従来型の指定管理ではコストが高く、ノウハウも残らない。」ということから、公園づくりに参加するボランティアを募集し、パーククラブを結成。直営管理を行う府との協力体制のもと、開園後1年経過した今も地域と協働しながら公園づくりを続けている。

渡辺「完成形がないことがこの公園の特徴。たとえばボランティアでも、〈つくるコトの楽しみ〉がパーククラブの高いモチベーションを維持できている理由だと思う。世代が違っても〈つくるコト〉を共有できているから、話もかみ合う。」

コトを重視する姿勢は、「公園内に遊具を置かない」方針にも表れている。公園にあるべきモノをつくるのではなく、コトを見つけ、コトを起こすことに注力していることは従来



の公園づくりと異なる点である。

■公園をつくり続けていくために

渡辺「企業グループ大輪会からの寄付金が公園収入の大部分を占めている。公園の性質上、営利事業で収益をあげることはできないが、プログラム利用料など、この公園にある仕組みの検討が必要。」

アクセスの悪さを解消するためにバス停が追加設置される等、少しずつ府内の協力的な動きも起こりつつあるようだ。

「遠方から来訪されるようになることも望ましいのでは。」という意見には、神奈川県藤沢の高校から生徒が研修に来る等、他地域との連携の動きもあるとのこと。

studio-Lは大輪会の寄付金の「人材育成」という枠組で業務委託を受け公園づくりを支援している。しかし公園づくりを持続するためには、自立が必要。studio-Lの支援がなくとも、府とボランティア、地域が協力して公園を運営できる仕組みをつくるのが将来的な課題となる。

■コミュニケーションとコト

渡辺氏は大学時代、海外インターンシップのマネジメントを行う学生NPOに所属。ブラジル・サンパウロで他国スタッフと交流した経験を話してくれた。様々なカルチャーショックを受けた中でも、各国のスタッフの名前を漢字の当て字で書き、プレゼントした時のことが最も記憶に残っているという。外国人スタッフが普段見慣れない毛筆で書いたことで、大いに盛り上がったという。〈名前を書くコト〉によって、言語もわからない他者とコミュニケーションがとれた経験が「どんな人でもコミュニケーションはとれる」という自信を彼に与えてくれたようだ。

渡辺「〈コト〉は僕にとって〈楽しみ〉です。ワークショップでは参加者といかに楽しくコミュニケーションがとれるかが肝になります。僕は日ごろ常にその方法を考えるようにしています。」

talk baton 07 を終えて

今回の座談会は公園内「郷の館」で行われた。隣では子どもが遊んでいて、お母さんが寝ている、という出張型talk batonでしか味わえない雰囲気だった。

開園してもうすぐ2年。地域でつくり続けるこの公園が今後どのような体制をつくり、コトがつけられるのか、注目したい。

対談日：2015.09.12
場所：泉佐野丘陵緑地
(大阪府泉佐野市)
モデレーター：松島 将太 (大建設計)